みんぱくリポジトリ 国立民族学博物館学術情報リボジトリ National Museum of Ethnolo

The "Raven's Arch" and Computer Databases Comparing Mythologies 100 Years after Jesup: Jesup Team Perspectives on Folklore Similarities

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-03-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: ユーリー, ベリョスキン
	メールアドレス:
URL	https://doi.org/10.15021/00001191

ヮヮヮヵヮヮ 「渡鴉のアーチ」とコンピューター・データベース

ジェサップ調査以降百年の神話を比較する1)

ユーリー・ベリョスキン

1. フォークロアの類似性をめぐるジェサップ・チームの展望

ジェサップ北太平洋調査 (JNPE) は,「プレ」考古学,「プレ」放射性炭素の時代に 実行された。JNPE の隊員たちは,彼らが踏査した地域の遠古について,また彼らが調 査した諸々の過程の複雑さに関しても,情報を有していなかった。ジェサップ・チーム が歴史の復元に際して用いた時間の尺度は,精々数百年という深度で,最大限見積もっ ても数万年が限度であった。例えば,ボゴラスはベーリング海峡北部のエスキモーを, 第4紀初頭に比定する記述を試みている (Bogoras 1924: 237)。JNPE 隊員らにとっては, 利用しえた考古学資料が微々たるものであったのみならず,その後に考古学が開発した 問題解決能力に関する限り,何れもほとんど想像だに及ばぬものであった。

隊員たちはまた、言語学者が自らの資料を駆使して、先史時代における関係の年代測定や層位化を試みる方法を案出する以前に、仕事をせねばならなかった。つまり、当時の言語学は、考古学データの欠落を補い、初期の民族接触の問題を解決することに、たとえ部分的ですら役立ちえなかったのだ。地理的に遠く離れて孤立する、諸語や語族間の並行現象をめぐるボアズの言説(Boas 2001 (1908): 23)も、今では承認されなくなった。形質人類学に関しても同様に、幾つかの相異なる個体群間の長期にわたる相互関係を把握する方法が研究者に提供されることなど、百年前には不可能であった。集団遺伝学は影も形もなかった。

しかるに、神話やフォークロア(本稿では両者を同義語と見做す)の研究は、JNPE プロジェクトの文脈である種の特権的地位を占めていた。ボアズもスウォントンも、ボゴラスもヨヘルソンも、またテイトもファランドも、彼らが収集した資料で最もユニークな部分は恐らくフォークロアであろう。20世紀のフォークロア研究では、その展望の変化が言語学や考古学におけるほど方法論の改善に依存することがなかった。神話研究も、新しい形式論的な手続きや方法というよりは、競合するさまざまな人類学派が提唱するアイデアによってむしろ左右されてきた。したがって、JNPE の参加者たちが自らのフォークロア・データを歴史的再構成のために援用する試みは、比較的最近の研究水準から見ても、恐らくさほど遜色のあるものではなかろう。ボアズのアイデアはある意味で、20世紀の後半に提唱された所論を遥かに抜きんでていた。

説話が比較的短命であって、容易に拡散する諸要素から構成されるため、特定の文化 に固有のものでないことを最初に説いたのは、ボアズであった。彼は、所与の文化にお いて獲得される文化要素の意味の研究と、これら文化要素本来の起源の問題を、決して混同することがなかった。「モチーフ」や「レプリケーション」という語彙は用いなかったものの、神話研究にもとづく歴史的再構成は、テキストを再話する人たちによって、モチーフが無意識のうちに再生産されるお蔭で可能になる、という前提がボアズの出発点であったことは明白である(Boas 1891: 20; 1896: 9; 1916: 878; 1928: 149–150; 1940: 290–94, 312–15, 331–43, 437–90; see also Mathé and Miller 2001: 111; Reichard 1921)。彼が信じたところによると、モチーフはきわめて長期にわたってその形を保持するが、これらモチーフで構成される神話テキストは、その意味をより迅速に変えてゆくという。モチーフの空間的分布のなかにかつての文化接触を再構成する鍵を見出し、自らが研究対象としたあらゆるモチーフの非多元論を奉じてその高精度を追求するボアズは、連続した分布が見出せないようなケースについては、これを疑わしいとして拒絶した(Boas 1940 (1914): 461)。私にはこの制限が不要のように思われる。とはいえ、ボアズが検証困難な再構成をさし控え、過剰なまでの慎重論をむしろ堅持したことは、典型的である。説話の意味の研究とその分布の研究との峻別は、ボアズの研究方法、ひいては JNPE

のフォークロア研究全般における最大の長所である。しかしながら、そこには弱点も指摘される。JNPEのフォークロア研究は、フォークロア比較という地域研究が有する可能性と限界の双方に対して、十分な配慮を欠いていた。ボアズとその同僚らは、原住民の神話に関してわれわれの知見に存在した膨大な溝を埋めてくれたとはいえ、個別の文化伝統に関する知識水準はいまだ頗る不均等であり、研究の地理的次元も、解決さるべき問題に比して相対的に狭すぎた。

アサパスカ,ユピク,イヌピアク,セーリシュ,エウェン(ラムート),アイヌ,ニヴフ(ギリヤーク),そしてアムール下流域の諸民族のフォークロアをめぐって,われわれが現在利用可能なデータの大部分は、JNPEの参加者らが大方亡くなったあとで記録されたものか,あるいはほかの人たちによって収集されていたものの,彼らの知る所とはならなかったデータの何れかであった。西シベリアや南シベリアの資料は、新大陸の神話に対して広範な並行例を提供するにも拘らず、JNPEの参加者の視野からは完璧に欠落していた。環太平洋領域で北海道やカリフォルニアの以南に見出される、西群(日本、東南アジア、メラネシア)ならびに東群(中央、南アメリカ)の神話は何れも、ジェサップ・チームにとってはやはり概ね未知のものであった。20世紀初頭における日本や琉球の豊かなフォークロアは、『古事記』を別にすると、日本語を弁えぬ人たちには高嶺の花であった。中南米の原住民のフォークロアも、その大半が公刊されたのは1925~1995年のことである。しかしながら、これらの神話はすべからく、北太平洋の伝統文化の配置をより広範な文脈で理解するためには不可欠のものであった。

ジェサップ・チームは,「プレ」コンピューター期の全ての研究者と同様, 共通する 不便に耐えていた。ボアズもヨヘルソンもまたボゴラスも, 最も初歩的な統計処理を実 践したに過ぎず、正真正銘の大型データベースを利用することはできなかった。かかる 欠点は、とりわけ形質人類学に遅滞をもたらした(Ousley and Jantz 2001)が、フォーク ロア研究の発展もやはり阻害した。

2. ヨヘルソン, ボゴラス, そしてコリヤーク

JNPE の参加者がフォークロア・データを処理する際に克服すべき,さまざまな難関を過小評価したのは驚くに当たらない。ヨヘルソンとボゴラスは、北太平洋域における初期の部族間関係の水準を測定するため、ある種の統計処理を試みた張本人である(Jochelson 1904; 1908, Bogoras 1902)。彼らは多分、借用と遺産の共有を弁別することの必要は理解していたであろう。しかしながら、首尾よい判断を提起できなかった彼らは、渡鴉の冒険をめぐるエスキモーのテキストを、恐らくインディアンから借用されたものであろうとだけ記して、それ以上の考察は放棄している。まずチョウニングが、これはデータベースの構築に際しての正しい方法ではなかったと指摘(Chowning 1962: 2-3)、次いでデ・ラグナも同様な論評を記している (De Laguna 1995: 324)²⁾。

自らの神話研究を北米北西海岸地域に限定するボアズとは異なり、アジアとアメリカの両大陸に跨ってさまざまな原住民集団の比較を進めたヨヘルソンの試みは、より野心的であった。しかるに、利用可能なユピク、イヌピアク、そしてアラスカのアサパスカのデータが乏しいことに加えて、JNPEの研究では古アジア系諸民族と北西海岸インディアンの神話が中核をなすため、ヨヘルソンは不可避的に、北米北西海岸と北東アジアを横断して広く分布するモチーフをまず選択、かくてエスキモーやシベリアその他で認められる並行事象は無視されることになる。彼はまた、アメリカ原住民と古アジア系諸民族のテキストに見出される類似性を強調する言葉遣いを、自らのモチーフに付与している。その結果、取るに足らない細部が誇張される傍らで、重要な差異が無視されてしまった。

ヨヘルソンは 1904 年の論文で、コリヤークのテキストから自ら選択した 122 篇の挿話(つまり、モチーフである)から 14 篇を取り上げて記述する。そのうちの 2 篇は特異な事例ではなくて、至る所に見出すことが可能である(№ 3 「両親の家から追い出されて砂漠へ赴き、強力なヒーローになる少年」。№ 4 「獣皮や鳥皮を身に纏って動物に変身する人たち、あるいはその逆の事例」)。別の 2 篇も、もし渡鴉を他の人間や動物に取り替えるならば、やはり特異事例とは言えない(№ 9 「動物に吞み込まれた後、内側からその動物を殺す渡鴉」。№ 12 「渡鴉とスモール・バードは競い合う求婚者。渡鴉は愚かな振る舞いを繰り返して敗北」)。ヨヘルソンが № 6 と № 14 のモチーフで用いた言葉遣いは、最も示唆的である。

№ 6 は「上に向けて矢が放たれ、天に至る道が開ける」である。「道が開ける」とい

う表現は曖昧で、物語の内容を的確に指示してはいない。だが、ヨヘルソンの引用する 北西海岸やプラトー(台地)の神話は全て、矢の梯子や鎖(Th F53³)、つまりコリヤー クの事例には欠如するモチーフをめぐる、より特異な事例にかかわっている。アジアに おける至近例は、ロシアの沿海地方に在住するオロチとウデへのもとに見出せるが、こ れらはジェサップ・チームにとって未知であったのだ。

№ 14 のモチーフは「川の水面に映る自分の姿を女性と誤認した大渡鴉は、彼女への 贈り物を水中に投じ続け、遂には溺死する」と記述される。ここでは、№6とは正反対 の事態が生じており、ヨヘルソンの言葉遣いは明示的で、そのモチーフは、コリヤーク のもとに見出されるが儘の内容が正しく定義されている。同じ物語は、今や周知のよう にチュクチやケレク、カムチャダール、ユカギール、マルコヴォのクレオール系住民 (Markovtsy), またラムート (エウェン) のもとでも, のちになって収録された。とこ ろで、やや紛らわしいのが、ヨヘルソンの引用した北西海岸インディアンの並行例であ る。(コモクス,ヌートカ,ベラクーラ,クワキウトルで認められる)並行例は全て, アジア資料を辛うじて想起させるテキスト(水に映った少年の姿を自分のものと捉え て、自らを美女と考える人食い女)に終始している。しかるに「川の中の花嫁」モチー フに典型的な物語は、チュクチやコリヤークからの借用が大いにありうるチャプリノの アジア・エスキモーのみならず(Menovschikov 1985, no. 36: 81-83),古アジア系諸民族と の直接接触が近過去ではまずありえない北アラスカのイヌピアクのもとでも(Hall 1975. no.PM124: 353-354), のちに収録されている。さらに迂遠な関係と見做さるべきは、ア サパスカ系のタフルタンの事例であろう (Teit 1919-1921, nos. 1, 26: 220)。以上を纏める と、コリヤークのモチーフに呼応する並行事象は、北西海岸のフォークロアには見出せ ないが,エスキモーやアサパスカ,またツングース語系のラムートのもとでも,その存 在が確認されるのである。

ボゴラスは、ヨヘルソンとは違って、ボアズが提唱するエスキモー文化のカナダ起源説を受け入れなかった。彼は、古アジア系集団とアメリカ原住民系住民の間を引き裂いた「エスキモーの楔」の実在は信じたものの、エスキモーは西方から、とどのつまりは南シベリアから渡来したと考えた。彼の論拠は、民族誌、言語学、形質人類学、口承伝承の伝える歴史のデータに求められており、その眼目は、ラップからチュクチまで、そして恐らくはエスキモーも包摂する「原アジア(proto-Asiatic)」集団の全域にわたって、文化の類似性を立証することにあった(Bogoras 1924; 1925; 1927)。フォークロア・データは、ベーリング海峡周辺における接触の、強度と方向の秤量だけに利用された(Bogoras 1902: 604-682)。

しかしながら、ヨヘルソンとボゴラスは、自らが犯した過ちや方法論上の問題にも拘らず、究極的には正しい結論に到達している事実は強調さるべきである。つまり、コリヤークは(恐らくは情報量においてやや遜色のあるカムチャダールとともに)、ベーリ

ング海峡西部地域のどの集団にも増して、アメリカ・インディアンとの繋がりが濃厚であった。

ヨヘルソンのリストに見えるふたつのモチーフは壮観である。そのひとつの № 11 は「蟹から真水を盗む渡鴉」である。私はこれに対し、「ひとりは真水を全て保全し、もうひとりはそれを飲んだのちに吐き出して川や湖を作る」という、より一般化された表現を提案したい。コリヤーク、タギシュ、タフルタン、エイヤク(数例における細部のみ)、トリンギット、ハイダ、ツィムシアン、クワキウトル、ヘイルツク、ヌートカ、パジェト・サウンド、そしてポモのヴァージョンは、この定義によく合致する。既知のカムチャダール・ヴァージョンは合致を見せていないが、コリヤークの事例にもっと類似するテキストは、いまだ採録されていないだけとも考えられる。

今ひとつのモチーフ№ 14 は、「鯨に変身した大渡鴉の息子エメムクット(Emémkut)が、隣人に銛で自分を仕留めるよう仕向けて、銛に着けられた魔法の紐を持ち去る」と表現されていた。これは「盗まれた私の銛」モチーフのコリヤーク・ヴァージョンである。ヨヘルソンがこれに対して提示した、シュウスワップ、フレイザー・リヴァー(ハルコメレン?)、コモクス、ヌートカ、ベラクーラの並行事例は、よく合致している。これら以外の事例(以下の記載を参照されたい)は、彼にとって未知であった。

コリヤークをインディアンと結び付けているモチーフはほかにもあり、アメリカの並行事例に初めて注目したのはボゴラスである(Bogoras 1902: 679-681)。かかる事例が今では、さらに多数見出されているのは言うまでもない。例えば、「トリックスターの傷つけられた顎」モチーフは、クチン、タフルタン、トリンギット、ハイダ、ツィムシアン、ヌートカ、キャリアー(但しアイズは除く)から報告されており、またアジア・エスキモー、セントローレンス諸島、セントラル・ユピク、インガリック、アッパー・タナナ、キャリアー、スカギット、クラカマス、ティラムーク、アルシー、クース、タケルマ、カラプヤ、ウィネバゴ、ペノブスコット、アイオワや、西シベリアのハンティ(オスチャク)でも、さらにはグアイアやアマゾンの幾つかの集団でも知られている。何れのケースにあっても、コリヤークと南アラスカの示す類似は顕著である。

3. 文化要素を再生産するフォークロア・モチーフ

3-1. シベリアと北米 versus 南米

さて、JNPE プロジェクトからはひとまず離れて、ボアズや彼の同僚たちが収集したデータに強度に依拠する私自身の研究へ話題を転じたい。私のデータベースは、主としてシベリアとアメリカのフォークロアから抽出した 25,000 件以上のテキスト要旨 (ディスクに収蔵) からなる。日本神話に関しては、池田ヒロコの著書 A Type and Motif Index of Japanese Folk-Literature (1971) と、日本古典文学の学術的露訳版(『古事記』『日本書紀』

『日本霊異記』, 諸風土記など) を参照した。

私は、諸テキストに繰り返して登場する要素をモチーフと定義する。モチーフは、人々によって再話される物語のなかへ統合されるから、ドーキンズの言うように「自らを再生産する」(Dawkins 1976: 203-215; 1995)のである。データベースを構築・更新する際には、次のような手続きがとられた。各テキストの要旨は、ひとつのテキストに含まれるさまざまなモチーフに対して1件ずつ、必要な回数だけコピーして該当する分析カタログにそれぞれ収納される。頻度表が作成される。これまでに1,000件以上のモチーフが選択されていて、その分布が180地域を横断して検索されている。データ量が増えるにつれて、それらの数も次第に増加する。当初のヴァージョンでは僅か64地域に過ぎなかったが(Berezkin 1998)、2001年には169地域に増えた(Berezkin 2002)。主成分分析をコンピューターで試みた結果、地域間のモチーフ分布を提示する主要パターンが析出されている。個々のパターンは、それぞれの主成分(principal components ——PC)に呼応している。プログラムは一対のモチーフ・パターンごとに、各地域で記録されたパターン・セットにおける類似ないし相違の程度を秤量して、全パターンの総体に対する各パターンの貢献度を測定する。

第1の PC は最も強力なパターンに対応する。われわれのケースでは,北米(とユー ラシア)の神話と、中南米(ならびにオーストラリア・メラネシア)の神話との間に見 られる相違がこれに当たる。第1群には最大のマイナス値が,そして最大のプラス値は 第2群に与えられる(プラス・マイナスの符号は随時取り替え可能)。これら両複合は とりあえず、前者を「ユーラシア・北米」複合(図1)、そして後者は「アマゾン・メ ラネシア」複合(図 2)と命名する。付与された数値間の数学的差は,個々の地域間の 地理的距離に呼応していない。北米モチーフの過半は、リオ・グランデ以南のサザン コーン(Southern Cone ――すなわち,ティエラ・デル・フエゴ,パタゴニア,アラウカ ニア、そしてブラジル南部やグラン・チャコの一部も包摂する地域)の諸神話にも見出 される。地理的に見ると、この地域は北米から最も遠い所にある。これら地理的に最遠 の両極地に特徴的なモチーフの幾つかは、きわめて特殊なものであるから、それぞれの 半球において独立に発生したと考えることは難しい。代表的事例は「時機設定の相談」 モチーフである。動物たちが寄り合って、特定の時間経過(年、冬、植生の季節、夜、 月経周期)には、幾つの時間単位を充てるべきかを相談する。時の単位を決めるべく、 足指や爪、羽、毛、あるいは縞模様の筋を数え上げる。通常は動物たちが冬や夜の長さ について話し合う。闇と光、寒暖の交代といったテーマに対する関心は生態学的に動機 づけられうるとしても、それについて議論する際の個々の遣り口は新世界にとって独創 的であるから、北米とパタゴニア間の並行事象は重要である。

これらの並行事例は、パレオインディアンの遺跡分布とよく呼応している。パンパと パタゴニアは、クローヴィス期に由来するパレオインディアンの文化伝統が、リオ・グ

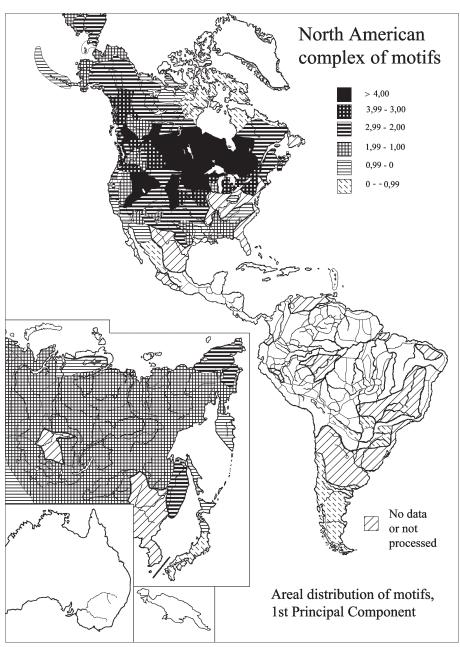


図1 空間的モチーフ分布の統計処理結果。ユーラシア・北米複合の第1主成分。

ランデ以南では最も明瞭に跡付けられる地域である(Morrow and Morrow 1999)。そこではまた、同伝統が完新世初頭までも存続していた(Martinez 2001; Politis and Gutiérrez 1998)。この地域は、生産経済の波及や複合社会の出現と結びつく文化変換の域外にあっ

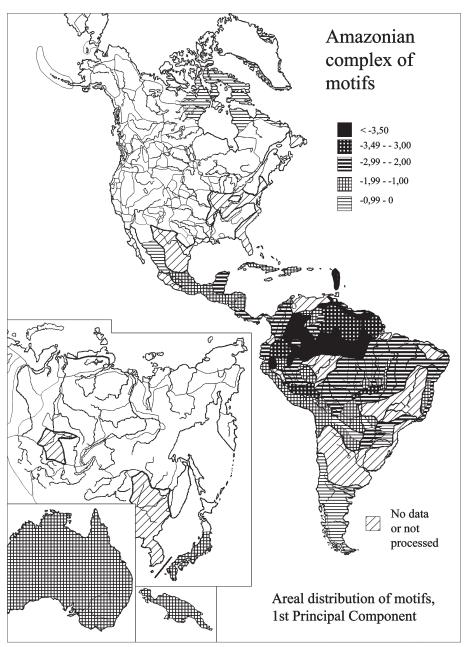


図 2 空間的モチーフ分布の統計処理結果。アマゾン・メラネシア複合。

た。かくて、パレオインディアン・フォークロアの諸要素も、まさにこの地において生 き延びることが期待されるわけである。

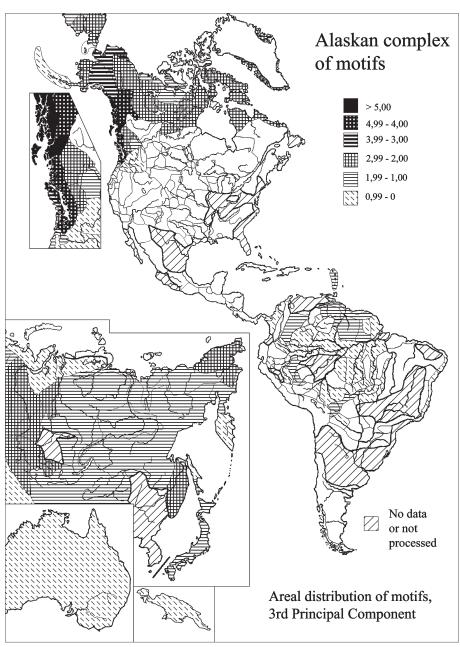


図3 空間的モチーフ分布の統計処理結果。中央ユーラシア複合。ユーラシアとアメリカで選択された, 12 件のモチーフ・セット。空間的分布。ハッチングは, 当該領域の内部で収録されたモチーフ数に従って 施されている。

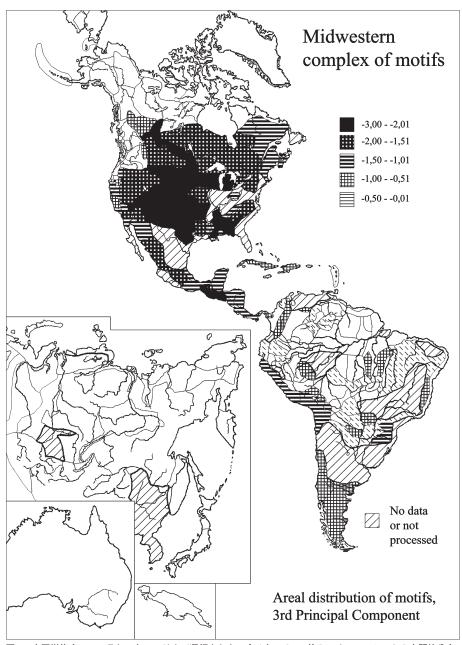


図4 太平洋複合。ユーラシアとアメリカで選択された、今ひとつの12件のモチーフ・セットの空間的分布。ハッチングは、当該領域の内部で収録されたモチーフ数に従って施されている。

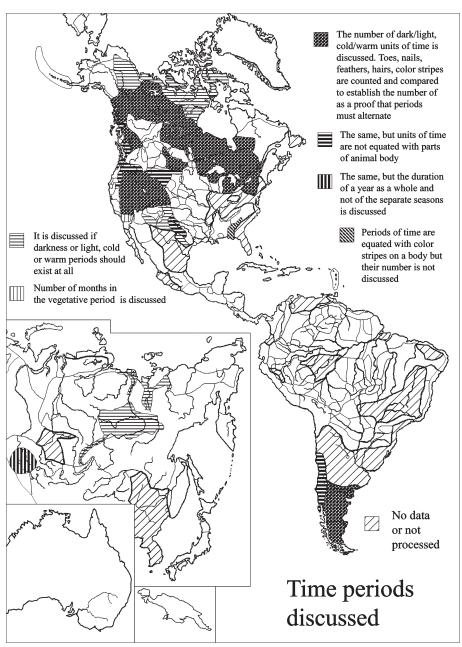


図5 太平洋複合(改訂版)。

3-2. 中央ユーラシア―北米の繋がり

アメリカであれアジアであれ、モチーフ分布における主流派によって傍流諸派が隠蔽 さるべきではない。例えば、アジアに認められる太平洋系神話は、基本的に「北方」系 であるとしても、大陸間に跨るクラスターというより、むしろ南米の神話に近い。仔細 に検討するなら、さまざまなモチーフの空間的分布と、その発祥地と目される土地とが、全く乖離しているようなモチーフ・セットを幾つも見出すことが可能である。以下では、そのような事例をふたつ採りあげてみよう。

第1群は、南シベリアや、それ以西ならびに以南で採録されるものの、時として遥かインド、ヨーロッパの地中海沿岸、東ヨーロッパにまで見出されるモチーフを包摂している。だが、北シベリアや北東シベリアではそれらが欠如し、西シベリアでも稀にしか見られぬのに、ロッキー山脈以東の北米では、とりわけ大平原と五大湖地方の全域では、全てが再登場する。私が参照した南シベリア・テキストは、モンゴル系(特にバイカル・ブリヤート)とテュルク系住民の間での採録である。これらのモチーフは、ツングース系、古アジア系、エスキモー系のグループに欠如する以上、ベーリング海峡を越えた近過去の接触を通じて、アメリカへもたらされたという気遣いはまず不要である。モチーフの大方は、英雄叙事詩の素材として典型的に組み込まれている。これらモチーフのオーストラリアにおける欠落と、南米での極端な希少性は、ユーラシアと北米の繋がりを裏付けるものである。

かかる一連のモチーフでは少なくとも 12 件が確認されているが、さらに発見される 余地もある。多くの場合にこれらのモチーフは、さまざまな組み合わせながらも同一テ キスト内に見出されるから、特定のフォークロア複合の形で一括して新世界へもたらさ れたことが覗われる。アジアでは、容易に借用される昔話のなかに、既に統合されてい る。にもかかわらず、かかる「エントロピー」は、それらが個々の地域に登場する姿の 多様性を抹殺するには至っていない。以下に掲げるのは、これらモチーフの一覧である。

1. 「天候をもたらす鳥たち」

男が巨鳥の巣にやってくる。戻ってきた鳥たちは、雲や雨、雹などをもたらす。主人公には雛鳥たちが予めそのことを語るのが通例である。北米と、アルタイの1ヴァージョンでは、雌雄の鳥がそれぞれ別種の天候(例えば雨と雪など)を持ち込む。コーカサスからトルケスタンにかけては、別種の天候をもたらす雄鳥と雌鳥という細部が欠落する。アメリカでは、南北アサパスカの事実上全てと、トリンギット、クテナイ、グロヴァントル、アラパホ、クロウ、ウィチタ、ホビに見出される。就中アサパスカでは、これが支配的な分布を示す唯一のモチーフである。上記以外の亜極北領域は、同モチーフの中核的分布域の域外である。

2. 「蛇が雛鳥を脅かす」

蛇ないし水棲の怪物が、強力な鳥の雛鳥を執拗に攻撃する。対する親鳥は無力だが、男がそれを殺す。親鳥は男を助けることで返礼する。北米ではアシニボイン、クロウ、ヒダツァ、アリカラに分布。ユーラシアでは、地中海東部から南シベリア、西シベリアに至る一帯でこのモチーフが知られる。南米では北コロンビアのコギのもとで1ヴァージョンが採録されている。

3. 「食人鬼の洞窟からの逃走」(K603)

ひとりの人が、動物ないし牧羊する怪物の主の住処に入る。主はその殺害を謀る。彼は、外へ出る動物の腹にはり付いて脱出する。ユーラシアでは主が一つ目の巨人(Cyclops)、北米ではバッファローの主。北米の分布域はクテナイ、ブラックフット、グロヴァントル、クロウ、キオワ、キオワ・アパッチ、リパン、チリカフア。ユーラシアでは、地中海東部から南シベリアにかけて分布する。

4. 「妻あるいは息子の承認」(H161, H324)

姿を変えた妻ないし息子を、男はその同類の仲間から救出せねばならない。北 米の分布域はトンプソン、平原オジブワ、ブラックフット、クロウ、マンダン、サ ンティー、オグララ、オマハ、ポンカ、オサゲ、アラパホ、シャイアン、アリカラ、 ポウニー、ウィチタ。ユーラシアではヨーロッパや地中海東部からインド、インド ネシア、日本まで分布する。

5. 「溺死した女が生きつづける」

産みの母親、義理の母親、別の妻ないしその他の競合者が若い女を水中に投じて、彼女の地位を奪取する。水中にあっても女は死なず、呼びかけに応え、自分の赤ん坊の面倒を見るため戻ってくる。夫が彼女を見付けて連れ戻す。北米の分布はオジブワ・チッペワ、フォックス、アシニボイン、オサゲ、アラパホ、ウィチタ、ビロクシー。ユーラシアでは東ヨーロッパからイランや中央アジアまで分布。一連のモチーフのうちでは、私がその南シベリアの並行事例を承知していない唯一のモチーフである。

6. 「小屋棲みの少年と棄てられた少年」(Z210.1)

少年のひとりは父ないし母とともに小屋で暮らす。棄てられて自力で成長した今ひとりは、兄弟のもとへ遊びに行く。捕らえられた後者は脱走を試みるも、やがて小屋でともに暮らすことに同意する。西シベリアでは、小屋棲みの少年が子犬の姿で登場する。北米ではロッキー山脈以東でチペウヤンやイヌイット以南の、事実上至る所に分布する。アマゾニア西部のヤグアは、南米での唯一の事例。ユーラシアではバイカル・ブリヤート(多くのヴァージョンあり)、マンシ、セリクープの

もとに分布。やや迂遠な並行例は地中海沿岸にまで見出される。

7. 「蚊と雷」

ひとりの危険な人間が吸血虫に、どこで食事し、誰の血を吸ったか、また誰の血が最も旨かったかと尋ねる。虫は嘘を言うか、あるいは応えられない。ほとんどのアメリカのヴァージョンやブリヤートの幾つかのヴァージョンでは、その人間が雷にほかならず、稲妻が今や人間ではなくて樹木に落ちるわけを、その神話は説明する。ユーラシアでは燕が虫の舌を噛み切って、話せなくする。北米ではタナイナ、タフルタン、シュウスワプ、トンプソン、リルート、カラプヤ、サンディレイク・クリー、チッペワ、ミクマク、ウィントゥ、マイドゥに分布。南米ではヤルロ、ハラクムベットに分布、やや雑な並行例がマタコに認められる。ユーラシアの分布域はコーカサス、ヴォルガ流域、トルケスタン、南シベリア。

8. 「ポティファル (Potiphar) の妻」(K2111)

女が若い男に申し込んで拒絶されたか、あるいは性的虐待を受けたと偽って、男を糾弾する。若者の有罪を信じた夫は、彼を殺すか、あるいは殺そうと企む。北米ではビーヴァー、ツィムシアン、ハイダ、西サハプティン、ネペース、クリーの幾つかの集団、オジブワ、キッカプー、ナスカピ、モンタネ、セネカ、ブラックフット、アシニボイン、ヒダツァ、サンティー、テトン、トゥニカ、ビロクシーに分布する。南米はワラオに分布。ユーラシアでは地中海沿岸や北ヨーロッパからインド、中国(西部?)にまで見出される。

9. 「大熊座を構成する7人の男」

北斗七星を構成する星はそれぞれが人間である。星座は通常,7人の男を表している。北米の分布域はクース,ウィネバゴ,サーシ,ブラックフット,アシニボイン,グロヴァントル,クロウ,シャイアン,アラパホ,キオワ,コマンチェ,ウィチタ。ユーラシアではクリミアやコーカサスからモンゴリアまで,またインドにも見出される。

10. 「最も若い義理の息子」

首長ないし王の3人娘(アメリカの例),あるいは4人娘(ユーラシアの例)が,花婿を選んで結婚する。末娘は、夫が貧しく病身で、また薄汚れて若過ぎるにも拘わらず、超自然的能力の持ち主と感じている。彼は猟師や戦士として成功を収めるのに、他の義理の息子らは、指定された課題を遂行できない。遂には彼の真の姿が顕わになる。北米の分布域はツィムシアン、サハプティン、ネペース、クテナイ、メノミニ、オジブワ、平原クリー、セネカ、ブラックフット、テトン、サンティー、オマハ、ポンカ、アイオワ、ポウニー、アラパホ、シャイアン、キオワ、北ショショ

ニ。このモチーフはトムソン (Thompson 2000: 329) の「気に染まぬ花婿」モチーフ (D733) より特殊である。後者は、主人公が競合者と比べられないテキスト (例えばコディアク) によく合致する。

- 11. 「呪医に扮したヒーローは、敵に傷つけられながらもそれを倒す」(K824, K1955) やや類似する「呪医に扮したトリックスターが敵を殺して食べる」モチーフは、きわめて異なる分布域を示すため「ヒーロー」譚に加えるべきでない。北米の分布域はイヌピアク、メノミニ、オジブワ、チッペワ、サンディレイク・クリー、ソルトー、ソーク、フォックス、平原クリー、アシニボイン、オマハ、ポンカ、アイオワ。南米ではペルーのモンターニャに、またユーラシアではコーカサス、中東、南シベリアにそれぞれ分布。北米中西部とユーラシアのヴァージョンでは、ヒーローが傷ついた敵を追って地下界に至る、という筋が格別の類似を示している。
- 12. 「特殊才能を具える仲間たち」

仲間たちは各々が格別な才能(体力、敏捷さ、視力など)に恵まれている。これは、ヨーロッパから南シベリアに至るまで最も広く分布するモチーフのひとつである。アメリカの3例は、大平原のテトン、キオワ、ウィチタに見出される。ユーラシア・ヴァージョンのほとんどは古典的な昔話に組み込まれているが、アルタイとモンゴルの物語では、主人公が北斗七星の7星に変身する件が、宇宙論的意味あいを帯びている。同じ結末は、キオワやウィチタの神話にも見出される。

3-3. アジアの太平洋地域―北米北西部―アマゾンの繋がり

第2群のモチーフ・セットは完全に異なる分布域を提示する。

1.「ひとりかふたりの少女がよい配偶者を求めて旅立ち、詐欺師や嫌らしい求婚者と出会う」

アジアではオロチとアイヌに見られる。新世界では、最も広く流布するモチーフのひとつである。北米の分布域はタナイナ、チルコティン、シュウスワプ、リルート、トンプソン、ネペース、クテナイ、パジェト・サウンド、アッパー・チヘリス、カウリッツ、キノールト、カトラメット、クラカマス、ティラムーク、クース、カラプヤ、タケルマ、モドック、メノミニ、ミシサガ、ポタワトミ、サンディレイク・クリー、ヒューロン、セネカ、ミクマク、パサマクォッディ、グロヴァントル、サンティー、アイオワ、アラパホ、カッド、クリーク、アラバマ、コアサティ、ユロク、ウィヨット、カロク、ウィンティ、ヤナ、アチョマウィ、チュマシュ、カワイース、ショショニ、ゴシュウテ、南パイウテ、チェメフエヴィ、リパン、モハーヴェ、セラノ、パパゴ、ココパ、ハワスパイ、ワラピ。南米ではクナ、グアヤベロ、シク

アニ, サメナ, ヤノマニ, ヤノマム, ナポ, カネロ, シュウアル, アチュアル, アグアルナ, デサナ, 固有トゥカノ, バラサナ, バレ, ウィトト, 中央アマゾンのトゥピ, スルイ, シパヤ, テネテアラ, ウルブ, トゥピナンバ, ワウラ, カラパロ, クイクル, カマユラ, トゥルマイ, バカイリ, イランへ, パレシ, ボロロ, マタコ, チョロテ, ニヴァクレ, マッカ, トバ, テウェルチェに分布する。北米でも南米でも多くの場合, 交叉路に掲げられた鳥の羽が正しい道, あるいは間違った道を指示する。

2. 「幼児が見知らぬ父親を選び当てる」(Th H481)

アジアでは、ティンギアン(恐らくはその他のフィリピン諸集団も),日本(播磨、山城の風土記)、海岸コリヤークに見られる。北米の分布域はビーヴァー、トリンギット、ヌートカ、キャリアー、シュウスワプ、トンプソン、リルート、コモクス、クララム、スカギット、スノホミシュ、カウリッツ、クラカマス、ティラムーク、サンポイレ、クリキタット、ネペース、クテナイ、オジブワの幾つかの集団、クリー、モンタネ、アシニボイン、グロヴァントル、サンティー、ポウニー、ウィチタ、コアサティ、リパン、ホピ、東ケレス、ティワ、テワ、ピマ、パパゴ。南米は、ワラオ、トゥピナンバ、ウアロチリ、チパヤ、タカナ、チリグアノ、ワウラ、カラパロ、ボロロ、チャマココ、チョロテ、マタコ、トバ、モコヴィに分布。

3. 「太陽,火,光が渡鴉や他の猛禽から,あるいは猛禽のお蔭で入手される」

アジアではオロチ、アイヌ、チュクチ、コリヤークに分布。北米の分布域はコディアク、アレウト、セントラル・ユピク、北アラスカのイヌピアク、マッケンジー・エスキモー、コユコン、インガリク、タナイナ、タナナ、アスナ、アッパー・タナナ、タギシュ、インナー・トリンギット、クチン、タフルタン、チペウヤン、エイヤク、トリンギット、ハイダ、ツィムシアン、ベラクーラ、ヘイルツク、クワキウトル、ヌートカ、チルコティン、カタウバ。南米ではアクリヨ、ワヤンピ、パリンティンティン、シパヤ、ジュルナ、テネテアラ、ウルブ、カシナウア、ピロ、グアラユ、チリグアノ、タピエテ、グアラス、トゥルマイ、カマユラ、クイクル、カラパロ、バカイリ、カヤビ、タピラペ、カラジャ、ボトクド(ボルン)、マタコ、チョロテ、モコヴィ、またグアラニの幾つかの集団にも分布する。

4. 「人が弓を連射して、前矢の背に次矢を当てつづける | (Th F53)

アジアではオロチ, ウデヘ, またオーストラリアやメラネシアの幾つかの集団に見られる。北米の分布域はコユコン, アッパー・タナナ, トリンギット, ハイダ, ツィムシアン, ベラクーラ, クワキウトル, ヌートカ, マカフ, キャリアー, シュウスワプ, トンプソン, リルート, コモクス, ハルコメレン, クララム, スカギット, スノホミシュ, ルクゲン, キノールト, キレウテ, パジェト・サウンド, オカ

ナゴン, カリスペル, サンポイレ, ワスコ, クラカマス, カスラメット, ティラムーク, アルシー, クース, クリキカット, クテナイ, カラプヤ。南米ではシクアニ, マキリタレ, ワイワイ, トリオ, パルクール, イスカリアナ, ワヤンピ, マイ・ウナ, ナポ, コレグアジェ, シュウアル, レトゥアマ, ヤグア, リオ・ジャムンダ, テネテアラ, ウルブ, シピボ, アマウアカ, チリグアノ, グアラス, クマナ, カマユラ, イランへ, カヤビ, パレシ, チャマココ, チョロテ, ニヴァクレ, マタコ, アチェ, チリパ, ムヤベに分布する。

5a. 「人が鳥や動物に色を塗るか、あるいは動物たちが互いに塗りあう」

通常は、2羽の鳥が互いに塗りあうことに同意する。但し、これは当初の計画、あるいは参加者の期待に反する展開である。アジアでは、ヴェトナム、チェルカン(アルタイ)、ヤクート、ルースコエ・ウスチエのロシア人クレオール、ニヴフ、日本、ユカギール、コリヤーク、アジア・エスキモーに分布する。北米の分布域はコディアク、チュガシュ、イヌピアク、マッケンジー・エスキモー、コッパー・エスキモー、カリブー・エスキモー、ネツィリック・エスキモー、イグルリック・エスキモー、バフィンランド・エスキモー、グリーンランド・エスキモーの全集団、クチン、アッパー・タナナ、アスナ、タフルタン、スラヴェイ、チッペウヤン、エイヤク、ハイダ、ベラクーラ、クワキウトル、ヌートカ、コモクス。南米ではシクアニ、クイヴァ、ワヤナ、アムエシャ、アヨレオに分布する。

5b. 「鳥や魚が自分の体に色を塗る」

殺されたり傷ついた動物や人間の、血や体液が着色の材料であるが、動物や人間の明色の皮を山分けしたり、自らの同様な皮膚を分け合う場合もある。北米ではキノールト、キレウテ、カスラメット、シャスタ、ビロクシーに分布する。南米の分布域は、グアラジョロ、サネマ、ヤノマニ、ヤノマム、ワラオ、ワイワイ、ヒシュカリアナ、カリニャ、ロコノ、ワヤナ、トリオ、ワヤンピ、マナオ(?)、マウエ、パリンティンティン、ムンドゥルク、シパヤ、シピボ、アムエシャ、マチグエンガ、カシナウア、ヤミナウア、エセエッジャ、チャコボ、カマユラ、カヤビ、イランへ、リクバクツァ、パレシ、チャマココ、カドゥヴェオ、ニヴァクレ、チョロテ、マッカ、マタコ、トバ、モコヴィ、ヤマナ。5aと5bのモチーフは、「2羽以上の鳥が色を塗って現在の体色を入手する」というモチーフのふたつの変異として記載することが可能である。

6a. 「最初の人,あるいは何人かの人が不安定な素材(蝋,雪,排泄物,樹脂,泥など)で作られるも、自然力(水,熱など)と接触して解体される」アジアでは、ロシア、セリクープ、アイヌ、日本、チュクチ、コリヤーク、ケ

レク、アジア・エスキモーに見られる。北米の分布域は、イグルリック・エスキモー、ポーラー・エスキモー、クチン、タフルタン、ハイダ、ツィムシアン、ベラクーラ、ヘイルツク、ヌートカ、シュウスワプ、トンプソン、リルート、コモクス、クララム、アッパー・チヘリス、カウリッツ、サンポイレ、メノミニ、サンディレイク・クリー、オジブワ、固有アルゴンキン、ブラックフット、アシニボイン。中南米では、ツォツィル、クイチェ、グアヤベロ、シクアニ、マキリタレ、タウリパン、ワヤナ、アパライ、コロラド、マイ・ウナ、シオナ、コファン、ナポ、シュウアル、アグアルナ、カヤビ、シピボ、カシナウア、チリグアノに分布。

- 6b.「最初のカヌーは、不適当な素材でこしらえたため沈没する」 北米ではクチン、ヌートカ、南米ではワラオ、クイクルにそれぞれ見出される。
- 7. 「狩猟具や漁具を盗むため、狩猟や漁撈の獲物に変身した人が、猟師や漁師を唆して自らを捕獲させるか、仕留めさせる」

アジアでは海岸コリヤークに認められる。北米では、イヌピアク、コユコン、タナイナ、タナナ、アッパー・タナナ、クチン、カスカ、トリンギット、ハイダ、チルコティン、トンプソン、サミシュ、クース、カラプヤ、クリキタット、カロク、オジブワに分布する。南米の分布域は、ヤバラナ、マキリタレ、アレクナ、ワピシャナ、マクーシ、カリニャ、ワヤピ、トゥクナ、ウファイナ、パリンティンティン、ムンドゥルク、シパヤ、ジュルナ、テネテアラ、トゥピナンバ、カヤビ、パレシ、ウムティナ、カラジャ、クラーオ、カマカン、マタコ、オファイエ、チリパ、カイワ、ムブヤ。

8. 「女の子宮が切開されて、胎児を取り出す。出産の仕方が説明され、出産が可能となる」(Th T584)

アジアでは海岸コリヤークのもとに認められ、北米では、コディアク、セントラル・ユピク、イヌピアクの全グループ、コッパー・エスキモー、ネツィリック・エスキモー、イグルリック・エスキモー、ポーラー・エスキモー、クチン、タナイナ、タナナ、アッパー・タナナ、タフルタン、キャリアー、チルコティン、シュウスワプ、リルート、トンプソン、フォックス、ユロク、カロク、ワイオット、フパに分布する。南米の分布域は、グアジロ、クイヴァ、シクアニ、ロコノ、ワオラニ、シュウアル、アグアルナ、ウラリナ、シャラナウア、カシナウア。

9. 「火を知る前は、食物は太陽の熱で焼かれた」

北米ではルクンゲン, ハルコメレン, サンポイレ, メノミニ, ユロク, 北パイウテに分布する。南米の分布域は, エンベラ, チミラ, シクアニ, クイヴァ, マキリタレ, ワラオ, タウリパン, アクリヨ, ワヤナ, シュウアル, ウィトト, トゥクナ, テネテアラ, シピボ, カシナウア, クリナ, チャコボ, ワリ, グアラス, ナン

ビクワラ、カヤビ、スヤ、カヤポ、クラーオ、ランコカメクラ、アピナイェ。

10. 「男が強い鳥に変身するか、その鳥を創造して、敵を連れ去る」

アジアではアジア・エスキモーのもとに見られ、北米ではイヌピアク、ヌニヴァク・ユピク、コディアク、チュガチ、アレウト、クチン、タギシュ、トリンギット、ハイダ、キャリアー、ティラムークに分布する。南米の分布域は、シクアニ、ピアロア、ヤノマニ、カリジョナ、バニワ、デサナ、ウィトト、マナオ(?)、ムラ(?)、マウエ、スルイ、パリンティンティン、ムンドゥルク、テネテアラ、モセテン、カマユラ、リクバクツァ、パレシ、ヤマナ。

11. 「男が川で女を釣り上げる」

アジアではウデへのもとに、北米ではロウァー・チへリスで見られる。南米の分布域は、マキリタレ、サネマ、ヤノマニ、ヤノマム、ワラオ、ペモン、ロコノ、ワピシャナ、ワイワイ、ヒシュカリアナ、タルマ、トリオ、アパライ、デサナ、タトゥヨ、ムンドゥルク、パリンティンティン、リクバクツァ、スヤ、カヤポ、マッカ。

12a.「人々が水鳥から、カヌーの作り方や漕ぎ方を学ぶ」

最初のカヌーは、鳥が変身したものか、あるいは鳥骨で作られている。北米ではコユコン、クチン、タナナに、そして南米ではシクアニ、クイヴァ、ワラオ、バレ、シピボ、カラパロ、クイクル、カラジャに、それぞれ分布する。

12b.「人々がカヌーを漕ぐ際,当初は櫂を縁に沿って動かしたが,やがて正しい使い方を学ぶ」

北米ではヌートカ,トワナ,アッパー・チヘリスに,そして南米ではワラオ,ロコノ,トリオ,シピボ,カラジャに分布。このモチーフは,きわめてしばしばモチーフ13aと結びついているため,後者も同一番号(12b)のもとに一括されている。

3-4. 討論

南北両アメリアを縦断し、さらにその以遠まで視界を広げてモチーフの分布パターンを検討する際には、ふたつの事情を考慮せねばならない。第1はシベリアから当該領域までの距離である。新世界のより奥地で採集されるモチーフは、その発祥地からの拡散もそれだけ早い時期に開始されたと想定することが許されよう。第2に、北米内部でのモチーフ分布であるが、主としてロッキー山脈以東で収集されるモチーフは、恐らくユーコン川とマッケンジー川の流域を経由してもたらされたであろう。主として太平洋沿岸部で採集されるモチーフは、南アラスカの海岸伝いに運ばれた。この2分割は、山岳地帯がいまだ氷床で覆われていた、新大陸への人類移住の初期段階にあっては、格別

に顕著だった筈である。しかし、(社会、経済情況を激変させることになった) 馬の導 入が行われた頃でさえ、ロッキー山脈は人の移動に対する重大な障害であり続けた。

日本―コリヤーク―北米北西部と南米東部を結び付ける12件のモチーフが、特別な神話複合を構成するとの所見には、これを有利に裏付ける幾つかの論拠がある。

他のモチーフ複合とは異なり、これらは南北両アメリカを通して広範な分布を示している。

ユーラシアの大陸部ではそれらが極めて稀にしか見られない(№ 6a がセリクープ、また № 5a はアルタイのチェルカンのもとで、それぞれ 1 例ずつ知られるのみ)。ヤクートとロシア人クレオールの間でも № 5a は知られるものの、ユカギール自身がチュクチやコリヤークの隣人から借用していたものが、近過去にユカギールから再借用された結果であることは、ほぼ確実である。セリクープは № 6a をロシア人から借用した可能性が濃厚。その発祥地には、西シベリアでなくて東ヨーロッパも含まれるからである。

北米では、件のモチーフ群がアラスカとカリフォルニアの間に集中的に分布する。北 西海岸の沿岸では、トリンギット、ハイダ、ツィムシアン、ベラクーラ、クワキウトル、 ヌートカの間で12件中8件が分有される傍らで、プラトーのセーリシュとその周辺の 海岸では11件も認めることができる。

モチーフの多くはまた、五大湖地方のセントラル・アルゴンキン、とりわけメノミニとオジブワの間でも採集されている。アルゴンキン諸語の東方起源説は、ひとつの説明となりうる。つまり、西アルゴンキン諸語の話者は、恐らくは東方と北東方から大平原に渡来したとされ(Goddard 2001: 77–78)、この語族の原郷は今から 4000 年前頃、コロンビア川の流域近辺にあったことが想定されている(Campbell 1997: 153–154)。もしわれわれのサンプルからメノミニとオジブワのデータを削除するならば、北米北西部における当該モチーフの凝集は明白となる。

南米では、これらのモチーフがアンデス山脈以東の低地では典型的であるが、アンデス山地(№2のみ)、パタゴニア(№1のみ)、ティエラ・デル・フエゴ(№5bと №10)では極めて稀である。

アジアでの分布は、ロシアの極東地方(とりわけオロチの間で)、サハリン、日本に集中している。これ以南では、フィリピン、東南アジア、メラネシアに見出されるが、私はこれらの領域のフォークロアをいまだ体系的に研究してはいないので、その他の事例が発見される可能性は残されている。12件中7件のモチーフがオロチ、アイヌ、日本のフォークロアでは分有されており、南方の太平洋地域のフォークロアには少なくとも4件のモチーフが認められる。

アジアにおける当該モチーフの分布頻度に関する限り、コリヤークが、就中圧倒的に海岸コリヤークが、その最高値を示している (N2; N3; N5a; N6a; N6a; N7; N8)。これは、コリヤークとアメリカ原住民のフォークロアの間に特別な関係を想定した、ボゴ

ラスとヨヘルソンのアイデアを支持するものである。コリヤークの説話に見出される諸要素に呼応するアメリカの事例は、北西海岸一帯でも、またセーリシュおよびそれ以南においても、同様に数多く認められる。海岸コリヤークに知られるモチーフ№8が、北西海岸では採録されていないが、エスキモー、アラスカのアサパスカ、内陸セーリシュの諸集団、そして北カリフォルニアのカロク、ユロク、ウィヨットの間には広く分布する(リトワンが近過去にプラトーからもたらした結果であろうか)。つまり、コリヤークの事例に対するアメリカの並行例は、「エスキモーの楔」で切断されたナ・デネ連続性という意味での、古アジア系文化に帰することはできそうにない。私は、より早期の、より大規模なプロセスがそこには反映されている。と考えるものである。

カムチャダールの間に対応するモチーフが欠落する事実の背景には、ふたつの要因が 想定可能である。まず、カムチャダール・フォークロアがコリヤークのものに比して格 段に未詳であること。次に、クリル(千島)諸島ではなくて、東シベリアの大陸辺縁部 を経由することで新世界への移住が可能であったという事実である。

北米北西海岸における「アマゾン型」モチーフの集中は、南アラスカとブリティッシュ・コロンビアを連ねて、氷床から解放された海岸や島嶼を経由して行われた移住の、痕跡にほかならない。それはまた、原始的形質特徴を示す頭骨や sundadont 型歯牙組織を具えた人類を、新世界にもたらすこともありえたであろう (e.g. Neves *et al.* 1999)。クローヴィス期の人々もまた、かかる諸特徴を共有した可能性はありうるものの、それを支持する積極的な情報はいまだない。

最後に、中央ユーラシア型のモチーフ複合であるが、アジアとアメリカの太平洋辺縁部では、何れのモチーフも、ごく稀にしか見出されない。それらは恐らく、アラスカ中部を経て、北米の内陸部に浸透していったであろう。同複合のユーラシアとアメリカにおける分布域は、ヤクートとツングース、古アジア、エスキモー、そして条件付きながら亜極北のアサパスカという、4種の大文化史領域で隔てられている。しからば、件の繋がりは早期のものであったに相違なかろう。しかしながら、これらのモチーフは、南米ではユニークな数例によって代表されるに過ぎぬ以上、人類移住の「原初」段階に新世界へ持ち込まれたと想定することは難しく、第4紀初頭というのが、穏当な妥協案のように思われる。アルタイからトゥヴァにかけて、南シベリア住民の間にアメリカノイドの基層が見出されるという形質人類学者のデータ(Kozintsev et al. 1999)は、上に提示したフォークロアの証言とよく符合している。ユーラシア型の昔話に呼応するアメリカの事例が、植民地支配の何らかの影響に由来しえないことも、強調さるべきである。すなわち、ロシア人、スペイン人、フランス人あるいはイギリス人が早々と浸透した、アラスカ、カナダや米国の大西洋地域、そして合衆国南西部のような新世界の地域では、それらの存在がまさに希薄だからである。

4. 結 語

ボアズもボゴラスも、またヨヘルソンも、アメリカ大陸への人類移住の問題を総体と して論ずることは決してなかった。JNPE が実施された当時,そのような課題は完璧に 学術の領野の埒外にあった。しかしながら、少なくともボアズ本人にとっては、JNPE プロジェクトが、包括的な新世界先史学に対する理解に到達すべき道程の、最初の一歩 であった。21 世紀のとば口に立つ現在.コロンブス以前のアメリアにおける文化発展 では、熟知されている局面もあり、またその概略のみが知られる局面もある。われわれ の知見は考古学データに依拠しており、遥かに低い度合いとはいえ、比較言語学にも 負っている。しかしながら、過去の歴史像を詳細に描き出すというこれら専門領域の力 量は,時間深度が増すにつれて益々減退してゆくから,アメリカへの人類移住の原初段 階は、最も把捉しがたい課題に留まっている。そして、まさにここにこそ、比較神話学 のデータが雌雄を決するような場が存在する。モチーフ群の空間的分布パターンが幾つ かの大陸を横断して観察される場合、もしそのような分布パターンが早期の発祥を示唆 すると想定するならば、さまざまなパターンを解釈することは容易である。より後期に なると、モチーフ分布を根底から変換する能力を備えた新しい人間集団の大規模な拡散 は、主として生産経済の効果的な発展と結びついていた(例えば、トゥピとグアラニの ブラジル東部および南部への侵入)。とはいえ、われわれの承知する限り、これらの移 住は常に大陸の範囲内で生起していた。

太平洋的モチーフ群の空間的分布パターンは、中央アジア―南シベリアのクラスターが示すパターンとは「逐一」異なっている。新世界では、後者に呼応する並行例がロッキー山脈以東の北米に集中するが、北米北西部と南米では稀にしか見出されない。

私は、太平洋領域やユーラシアの内陸領域がアメリカへの人類移住で果たした役割を評価するなかで、後期段階(第4紀初頭?)にあっては後者が支配的な役割を演じた、との結論に到達している。原初期における人類の移住は、海岸を経由するルートだけで行われたか、あるいは海岸ルートと内陸ルートが同時に併用されることもありえた(北米モチーフに呼応するパタゴニアの事例は、クローヴィス期に由来する人口移動と関連するように思われる)。環太平洋領域で今日採録されるモチーフ群が、今から12,000年前頃にはシベリア全域に、もっと広範に分布していた可能性も否定できない。

当初にアラスカの海岸に沿って行われた人類移住の可能性と、初期移住民が原初的な 形質特徴を具えていた蓋然性は何れも、グリーンバーグが言語資料に拠り(Greenberg 1987; 1996; Greenberg *et al.* 1986)、そしてターナーは歯牙組織に関する証拠にもとづいて (Turner 1983)提唱する、新世界への人類移住3段階論(アメリンディアン、ナ・デネ、 エスキモー)という通説の埒外に留まっている。後続したアメリカノイド遺伝子の進入 は、歯や頭骨の原初的特徴を潜在化させており、また今から6000~8000 年以上も前に 分裂した諸言語の信頼できる分類もほとんど期待できないから、当該の諸事実も実際は、容易には確認されえなかった(Snow 2002: 80–81)。しかしながら、頭骨や歯牙組織に関する新しいデータ、とりわけ南米の新データが報告されるに及んで、アメリカノイドに先立つ、新世界への人類移住の蓋然性は、無視することができなくなった。

広く分布するアメリンディアン・モチーフのうちで、旧世界には全く欠落する事例が幾つか(例えば「アイ・ジャグラー」「シャープ・レッグ」)知られている。その他のモチーフでも、ユーラシアの分布は頗る断片的であるか、迂遠な並行例である。他方で、アマゾン複合のモチーフの多くは、オーストラリアやメラネシアのみならず、ヨーロッパやアフリカでも見出される。北米のモチーフ・セットの変動幅はもっと独特である。それは恐らく、西半球ばかりでなく全地球規模でも、極端な地位を占めるであろう。これは、アメリンディアンがその旧世界の故郷を完全に放棄し、彼らの「傍系親族」のみが後のユーラシア住民のなかに包摂されている、というアイデア(Kozintsev et al. 1999)を裏付けるものである。

[英文原稿より井上紘一訳]

注

- 1) 本研究は、そのさまざまな段階で、International Research & Exchange Board (IREX); Smithsonian Institution Small Grants program; Russian Fund of Humanities; Dumbarton Oaks Library and Collection から研究助成を賜った。ダンバートン・オークス図書館の Edward Keenan 館長、プレコロンビア研究室の Jeffrey Quilter 室長、ならびに同館スタッフの皆様には、プレコロンビアン・ライブラリーの所蔵する豊かな研究資源を利用するという稀有な機会が与えられたことに対して、格別なる謝辞を申し上げたい。多年にわたって私の必要とする刊行物を送り続け、研究テーマを共有し、諸問題の解決を支援していただいた友人や同僚の名をすべて掲げることは不可能であるが、就中 Jan-Åke Alvarsson, Lloyd Anderson, Monica Barnes and David Fleming, Elizabeth Benson, Duccio Bonavia, Anna Borodatova, Alexander Kozintsev, Igor Krupnik, Karen Olsen Bruhns, Irene and Leonard Peyton, Izumi and Melody Shimada, Soeren Wichmann, そして今は故人となられた Gerardo Reichel-Dolmatoff と James Vanstone の諸兄姉からは、格別な御高配を賜わった。
- 2) デ・ラグナが、エスキモーはベーリング海峡への最近の渡来者ではないと主張する際に見せる、考古学への思い入れもやはりかなりナイーヴであった、と指摘することができよう。 4000 年という時間幅は、民族学者の視座よりすれば、確かに「早い (early)」とも言えようが、新大陸へセーリシュ語やナ・デネ語の話者の先祖が到来した時期と比べるなら、「遅い (late)」と形容することも可能である。
- 3) 本稿では、トムソンのモチーフ番号 (Thompson 1955–1958) が体系的には付与されていない。 該当するトムソン番号は多くの場合に欠如する。

参考文献

Berezkin, Y.E.

- 1998 Central and South American Indian mythologies. First results of computer processing. *Acta Americana* 6(1): 77–102.
- 2002 Some results of comparative study of American and Siberian mythologies: Applications for the peopling of the New World. *Acta Americana* 10(1): 5–28.

Boas, F.

- 1891 Dissemination of tales among the natives of North America. *Journal of American Folklore* 4(12): 13–20. (Reprinted in Boas 1940: 437–445).
- 1896 The growth of Indian mythologies. *Journal of American Folklore* 9(32): 1–11. (Reprinted in Boas 1940: 425–436).
- 1916 Tsimshian mythology: Based on texts recorded by Henry W. Tate. *Bureau of American Ethnology Annual Report for the Years 1909–1910*, 31, pp. 29–1037. Washington, D.C.: Government Printing Office.
- 1928 Anthropology and Modern Life. New York: Norton.
- 1940 Race, Language, and Culture. Chicago & London: University of Chicago Press.
- 2001 [1908] The results of the Jesup Expedition. In I. Krupnik and W.W. Fitzhugh (eds.), *Gateways*, pp. 17–24.

Bogoras, W.

- 1902 The folklore of Northeastern Asia, as compared with that of Northwestern America. *American Anthropologist*, n.s. 4(4): 577–683.
- 1924 New problems of ethnographic research in Polar countries. *Proceedings of the 21st International Congress of Americanists, First Part. Held at The Hague, August 12–16, 1924.* pp. 226–246. Leiden: E.J. Brill.
- 1925 Early migrations of the Eskimo between Asia and America. *Congrès International des Américanistes, Compte-Rendue de la 21e Session. Deuxième Partie. Tenue á Göteborg en 1924*, pp. 216–235. Göteborg Museum.
- 1927 Владимир Г. Богораз, Древние переселения народов в Северной Азии и в Америке (Ancient human migrations in Northern Asia and in America). *Сборник Музея антропологии и этнографии* 6: 37–62. Ленинград.

Campbell, L.

1997 American Indian Languages. New York & Oxford: Oxford University Press.

Chowning, A.

1962 Raven myths on Northwestern North America and Northeastern Asia. *Arctic Anthropology* 1(1): 1–5.

Dawkins, R.

- 1976 The Selfish Gene. New York & London: Oxford University Press.
- 1995 River out of Eden. A Darwinian View of Life. New York: Basic Books.

De Laguna, Federica

1995 Tales from the Dena. Seattle & London: University of Washington Press.

Goddard, I.

2001 The Algonkian languages of the Plains. *Handbook of North American Indians* 13: 71–79.

Washington, D.C.: Government Printing Office.

Greenberg, J.H.

1987 Languages in the Americas. Stanford: Stanford University Press.

1996 In defense of Amerind. International Journal of American Linguistics 64(2): 131–164.

Greenberg, J.H., C.G. II Turner and S.L. Zegura

1986 The settlement of the Americas: A comparison of the linguistic, dental, and genetic evidence. Current Anthropology 27(5): 477–497.

Ikeda, H.

1971 A Type and Motif Index of Japanese Folk-Literature (FF Communications 209). Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia.

Jochelson, W.

1904 The mythology of the Koryak. American Anthropologist 6(4): 413–425.

1908 The Koryak. (The Jesup North Pacific Expedition Publications Vol. 6, and American Museum of Natural History Memoirs 10). Leiden: E.J. Brill; New York: G.E.Stechert. (Reprinted in 1975 by AMS Press).

Kozintsev, A.G., A.V. Gromov and V.S. Moisejev

1999 Collateral relatives of American Indians among the Bronze Age populations of Siberia? American Journal of Physical Anthropology 108(2): 193-204.

Krupnik, I. and W.W. Fitzhugh (eds.)

2001 Gateways: Exploring the Legacy of the Jesup North Pacific Expedition, 1897–1902. (Contributions to Circumpolar Anthropology 1). Washington, D.C. Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.

Martinez, G.A.

2001 'Fish-tail' projectile points and megamammals: New evidence from Paso Otero 5 (Argentina). Antiquity 75(289): 523-528.

Mathé, B. and Miller, T.R.

2001 Kwazin'nik's eyes: Vision and symbol in Boasian representation. In I. Krupnik and W.W. Fitzhugh (eds.), Gateways, pp. 107–138.

Menovschikov

1985 Г.А. Меновщиков (ред.), Сказки и мифы эскимосов Сибири, Аляски, Канады и Гренландии (Eskimo Myths and Tales from Siberia, Alaska, Canada, and Greenland). Москва: Наука.

Morrow, J.E. and T.A. Morrow

1999 Geographic variation in fluted projectile points: A hemispherical perspective. American Antiquity 64(2): 215-231.

Neves, W.A., J.F. Powell and E.G. Ozolons

1999 Modern human origins as seen from the peripheries. Journal of Human Evolution 34: 129-133.

Ousley, S. and R. Jantz

2001 500 years old questions, 100 years old data, brand new computers: Biological data from the Jesup North Pacific Expedition. In I. Krupnik and W.W. Fitzhugh (eds.), Gateways, pp. 257-277.

Politis, G.G. and M.A. Gutiérrez

1998 Gliptodontes y casadores-recolectores de la region Pampeana (Argentina). *Latin American Antiquity* 9(2): 111–134.

Reichard, G.A.

1921 Literary types and dissemination of myths. *Journal of American Folklore* 34(133): 269–307. Snow, D.R.

2002 American Indian migrations: A neglected dimension of paleodemography. *Smithsonian Contributions to Anthropology* 14: 75–83.

Teit, J.A.

1919–1921 Tahltan tales. *Journal of American Folklore* 32(123): 198–250; 34(133): 223–253; 34(134): 335–356.

Thompson, S.

1955–1958 Motif-Index of Folk Literature. Vol. I–VI. Copenhagen & Bloomington.

2000 *Tales of the North American Indians*. Mineola & New York: Dover Publications. (Originally published in 1929 by Harvard University Press).

Turner, C.G.

1983 Dental evidence for the peopling of the Americas. In R. Shutler (ed.), *Early Man in the New World*, pp. 147–157. Beverly Hills: Sage Publications.